The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清代音韻学における今音学の位置付け ： 顧炎武・江永・戴震を中心に
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	中国研究集刊. 2023, 69, p. 283-296
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　湯浅邦弘教授退休記念号（第六十九号）　令和五年（二〇二三）三月　二八三―二九六頁

清代音韻学における今音学の位置付け
―顧炎武・江永・戴震を中心に―

鳥羽　加寿也

はじめに

本論文は清代の音韻学者、とりわけその発展段階に活躍した、顧炎武・江永・戴震の今音に対する認識（注1）を分析し、その認識の顧炎武から戴震に至るまでの変化や、変化をもたらした要因を考察するものである。

清代音韻学史の研究において、主要な学者たちの古音研究史に関してはすでに数多くの論考があり、古音分部の過程も十分に明らかになっている。また古音学と清代思想との関連についても、顧炎武や戴震を取り上げた論考が一定数存在する。しかしながら、古音学にとって不可欠な基礎である今音資料の扱いやそれに対する認識に関するものは、管見の限り数少なく、木下鉄矢氏の「古音学の歴史――学的認識の形成及び深化の過程」（注2）などで触れているのが挙げられるほどである。本論文では、まず清代音韻学の精華である古音研究と今音資料の関係について述べ、次に顧炎武・江永・戴震の今音に対する認識についてそれぞれ分析し、最後に三者の認識の違いとその要因について検討する。

一　古音研究における今音資料

清代を代表する学問である考証学の発展には、古典それ自体に立脚した正確なテキスト分析が不可欠であった。正確なテキスト分析には、まずはテキストを構成する言語それ自体に対する検討が必要となる。言語は音声によって成り立つ。そこで後世の変化を経た音ではなく、古の正しい音で古典を解釈するという姿勢のもと、明末清初の顧炎武を嚆矢として、古音学は発展した。

顧炎武の『音学五書』は、それ以降の全ての古音学の基礎となったともいえる重要な著作である。顧炎武以前にも、呉棫等によって、『詩経』に代表される上古韻文の韻脚から帰納することで、上古韻部を分ける試みは行われていたが、それらの試みと顧炎武の作業には重大な差異があった。すなわち、①顧炎武以前は平水韻（注3）に依ったのに対して、顧炎武は『広韻』の細分された韻目に依ったこと、②『広韻』に依りつつも、その韻目に拘泥せず、時には一韻目を分割し、複数の上古韻部に帰属せしめたこと（いわゆる「離

析唐韻」）、③個別の字のレベルではなく、複数の字を纏めたグループ（韻部）のレベルで古音と今音との異同を考えたことである。これらが顧炎武の行った作業の技術的な成功の要因である。

顧炎武の成果を受けて、さらに研究を進めたのが江永である。江永は顧炎武の古音十部をさらに細分化し、古音十三部を立てた。その詳細に関してはここでは省略するが、江永が顧炎武の研究成果を進める際に重視したのは、今音の体系を分析する等韻学を活用した審音（注4）の手法であった。

江永に続く古音学の成果は、戴震及び段玉裁によってもたらされた。古音学に関して江永から強い影響を受けた戴震は、段玉裁の研究成果（注5）も取り入れつつ、晩年には古音二十五部を立て、それまでの研究成果を集大成している。その研究姿勢は、上古韻文の韻脚からの帰納による考古の手法とともに、江永同様に等韻学に立脚した審音の手法も重視するというものであり、今音資料や韻図への重視がみられる。

今音資料、特に『広韻』（注6）無くして、古音学は成立しえない。顧炎武以降の音韻学者で、『広韻』に代表される今音資料を無価値と断じたものは存在しない。しかしながら、一言に今音に価値を認めるといっても、単に復古や存古の道具としての価値を認めるのか、或いは研究対象としての価値や儒教経典研究に次ぐ重要な価値までも認めるのか、その方式は多種多様であり、学者ごとに異なるといっても過言ではないだろう。次の第二章より、顧炎武・江永・戴震を取り上げ、それぞれの今音への態度を見てみよう。

二　顧炎武の今音研究

清代の古音学の濫觴をなし、江永や戴震にも影響を与えた顧炎武の音韻研究の成果は『音学五書』に集約されている。『音学五書』は『音論』・『詩本音』・『易音』・『唐韻正』・『古音表』の五書からなり、その中でも今音資料である唐代の韻を古音によって正す書である『唐韻正』が入門とされ（注7）、なおかつ最大の分量であることからも、顧炎武が今音を重視していたことが窺われる。顧炎武の今音に対する認識を探るには、何はともあれ『音学五書』に依る必要があるだろう。まず『音学五書』の「敍」（『音学五書』、中華書局、一九八二年）に以下のような記述がある。以下引用は旧字の原文とともに筆者による訳を挙げる。

三百五篇、古人之音書也。魏晉以下、去古日遠、詞賦日繁、而後名之曰韻。至宋周顒・梁沈約而四聲之譜作。然自秦漢之文、其音已漸戾於古、至東京益甚、而休文作譜、乃不能上據雅南、旁摭騷子、以成不刊之典、而僅按班張以下諸人之賦、曹劉以下諸人之詩所用之音、撰爲定本。於是今音行而古音亡、爲音學之一變。

下及唐代、以詩賦取士、其韻一以陸法言『切韻』爲準。雖有獨用、同用之注、而其分部未嘗改也。至宋景祐之際、微有更易。理宗未年、平水劉淵始竝二百六韻爲一百七韻、元黄公紹作『韻會』因之、以迄於今。於是宋韻行而唐韻亡、爲音學之再變。

世日遠而傳日訛、此道之亡蓋二千有餘歳矣。炎武潛心有年、既得『廣韻』之書、乃始發悟於中而旁通其説、於是據唐人以正宋人之失、據古經以正沈氏唐人之失、而三代以上之音、部分秩如、至賾而不可亂。

『詩経』三百五篇は古人の音書である。魏晉以降は、古から時が経つにつれ、辞賦はますます繁雑になり、後に名付けて「韻」というようになった。宋の周顒や梁の沈約に至り、四声の譜が現れた。そして秦漢の文より、その音は段々と古音と離れ、南朝に至ってはますます甚だし

く、沈約が音譜を作るにあたっては、上は『詩経』に依り、傍らに「離騒」や諸子を拾い、不朽の音譜を作ることもできず、ただ班固や張衡らの賦や、曹植や劉楨らの詩の音を集めて音譜とした。こうして今音が行われ、古音は忘れられたのである。これが音学の一度目の変化である。

唐に至っては、詩賦によって士を採用するようになり、その音書は専ら陸法言の『切韻』を標準とした。「独用」や「同用」の注はあったが、その分部は変わらなかった。宋の景祐に至って、僅かに変更が加えられた。理宗の末年に、平水の劉淵が初めて二百六韻を併せて百七韻として、元の黄公紹はこれによって『韻会』を作り、今に至る。こうして宋の韻が行われ、唐の韻は忘れられたのである。これが音学の二度目の変化である。

時が経つごとに伝承も損なわれ、この音学の道が滅んでもう二千年余りになろう。私は研究に専念すること長年にして、『広韻』を得てようやく内に悟るところがあり、その説にあまねく通じるようになった。そうして唐人によって宋人の誤りを正し、古経によって沈約や唐人の誤りを正すと、三代以前の音は、部が整然と分かれており、奥深く乱すことのできないものであった。

ここでは顧炎武は、「沈氏唐人」すなわち『切韻』に代表される韻書や韻譜の出現と、それによる古音の衰退を、「音学の一変」と見なし、「古経」によって正されるものであるという認識を示している。ただしそれと同時に、『広韻』はまた「宋人」の誤り、すなわち理宗末年の劉淵による改悪と、それによる唐代の韻の衰退を正すための資料でもあり、いわば当時行われていた簡略化された百七韻と、古音とを結びつけるための橋渡しの役割を果たすものでもあった。

このような考えは、「答李子徳書」においてさらに明確に示されている。「答李子徳書」（『音学五書』所収）に以下のようにある。

夫子有言「齊一變至於魯、魯一變至於道」。今之『廣韻』、固宋時人所謂菟園之册、家傳而戸習者也。自劉淵韻行、而此書幾於不存。今使學者睹是書、而曰「自齊梁以來、周顒沈約諸人相傳之韻固如是」也、則俗韻不攻而自絀。所謂「一變而至魯」也。

又從是而進之五經三代之書、而知秦漢以下至於齊梁歴代遷流之失、而三百五篇之詩、可弦而歌之矣、所謂「一變而至道」也。故吾之書、一循『廣韻』之次第而不敢輒更、亦猶古人之意、且使下學者易得其門而入。

孔子は「斉は一変すれば魯に至り、魯は一変すれば道に至る」と言った。今の『広韻』は、宋代の人にとっては平易な書であり、誰もが伝え習ってきたものであるが、劉淵の平水韻が行われてからは、この書はほとんど滅んでしまった。今学ぶ者にこの書を示し、「斉梁以来、周顒や沈約らが伝えてきた韻はそもそもこのようであった」と言えば、俗韻（平水韻）は攻めるまでもなく退けられるだろう。これが「一変して魯に至る」である。

さらにそこから三代の書にこの方法を進めれば、秦漢から斉梁に至るまでの歴代の変化の誤りが分かり、『詩経』三百五篇の詩も、音楽に合わせて口に出して読めるようになるであろう。これが「一変して道に至る」である。故に私の本は、専ら『広韻』の順序を守り、あえて変更は加えなかったのである。これはまた古人の考えたように、後に学ぶ者

が把握しやすく入門しやすいようにするためである。

ここでは顧炎武は『論語』雍也篇にある孔子の語を引き、道に至るまでの教化の段階としての斉→魯→道という図式を、俗韻→『広韻』→古音という音声の段階的改善による復古の道筋（注8）に当てはめている。すなわち顧炎武にとっては、古音→唐代の韻→平水韻という「音学の一変」及び「音学の再変」という二度もの変革を、まさに逆に辿るように、俗韻から古音への復古においても、やはり二度の「変」が必要なのである。ここにおいて俗韻と古音とを隔てる、あまりにも巨大な落差を超えるための、踏み台としての役割を果たしうるものが今音であり、また今音を記録した韻書である『広韻』だったのである。

また、顧炎武が古音十部説において、十部の順序を『広韻』に合わせていること、さらに入門者にはまず『唐韻正』から始めるようにと述べていることは、『広韻』に積極的な価値や権威を認めたというよりも、学習の利便性を考えてのことであることも、この文から読み取れるだろう。この他にも、『音論』の「唐宋韻譜異同」においても、「古音を審らかにせんと欲せば、必ずや唐韻より始めよ」（注9）と述べられており、顧炎武が古音学を志す後学に対して、『広韻』からの入門を勧め、また想定していたことは明らかである。

以上、顧炎武の今音に対する認識を簡単に見てきたが、簡潔に纏めれば、顧炎武は『広韻』によって記録された今音を、決して「正しい」音を記録したものではないとはいえ、当時の人々が慣れ親しんだ平水韻と、追求すべき古音との間の懸け橋となり得る道具として考えており、価値を認めていたといえるだろう。

三　江永の今音研究

古音学に「審音」の手法を積極的に取り入れ、顧炎武説を修正したのは江永である。江永は顧炎武とは異なる時代に生き、直接の面識もなく、専ら『音学五書』により顧炎武の研究を知り得たのであって、顧炎武とは全く異なる方向から、顧炎武説を修正することができた。江永の音韻関連著作には『古韻標準』・『音学辨微』・『四声切韻表』があるが、ここでは『古韻標準』の「例言」から、江永の今音に対する認識を探ってみよう。『古韻標準』の「例言」（『音韻学叢書』所収、広文書局、一九六六年）に以下のようにある。

桐城方以智密之曰「古音之亡於沈韻、猶古文之亡於秦篆然。沈韻之功、亦猶秦篆之功。自秦篆行而古文亡、然使無李斯畫一、則漢晉而下、各以意造書、其紛亂何可勝道。自沈韻行而古音亡、然使無沈韻畫一、則唐至今、皆如漢晉之以方言讀、其紛亂又何可勝道」。

此言實爲確論。方氏雖誤以今行之韻爲沈韻、然則韻之合併、亦因唐宋之同用。幸而二百六部之韻書猶存、考古者猶可沿流而溯源。

桐城の方以智曰く「古音が沈約の韻によって亡んだというのは、古文が秦の篆書によって亡んだようなものである。沈約の韻の功績も、秦の篆書の功績のようなものである。秦の篆書が行われるようになって古文が滅んだとはいうが、もし李斯による文字統一がなければ、漢魏以降、それぞれが勝手に文字を作っただろうが、その混乱は言葉にできないほどであっただろう。沈約の韻が行われるようになって古音が滅んだというが、沈約の韻によって統一されなければ、唐から今に

至るまで、漢晋の頃のように各地が各方言で読むことになり、その混乱はさらに言葉にできないほどであっただろう。」

これはもっともな説である。方氏は今行われている韻（平水韻）を沈韻と誤解してはいるが、韻の合併も、唐宋代の韻の同用の規定によるのである。幸いにして二百六部の韻書（『広韻』）は現存しており、考古を行うものは時代の流れに沿ってもとを辿ることができるのだ。

江永はまず方以智の言葉を引用し、『切韻』の登場とそれによる言語音の統一を、文字史における秦による字体の統一に例え、その功績を認める。そして『切韻』系の韻書である「二百六部之韻書」（『広韻』）が現存することにより、考古を行うことができるとして、高く評価している。すなわち江永は、今音を代表する韻書である『切韻』の登場により、古音が忘れさられたという負の面よりも、『切韻』による整理を経たことにより、それ以降の混乱が避けられ、古音が却って保存されたという功績の側面を強調しているということである。

これに関連して、江永は顧炎武の今音研究に対しても直接疑念を投げかけている。同じく『古韻標準』「例言」に以下のようにある。

韻書流傳至今者、雖非原本、其大致自是周顒沈約陸法言之舊。分部列字、雖不能盡合於古、亦因其時音已流變、勢不能泥古違今。其間字似同而音實異、部既別則等亦殊、皆雜合五方之音、剖析豪釐、審定音切、細尋脈絡、曲有條理、其源自先儒經傳子史音切諸書來。

六朝人之音學、非後人所能及、同文之功擬之秦篆當矣。今爲三百篇考古韻、亦但以今韻合之、著其異同、斯可矣。必曰「某字後人誤入某韻、混入某韻」（注10）、此顧氏之過論。

韻書の中で今まで伝わっているものは、原本ではないとはいえ、おおよそ周顒や沈約、陸法言の旧を保ったものである。その分部や列字は、全て尽く古に合うわけではないものの、これは当時すでに語音が変わっていたので、必然的に古の例に拘って同時代の音を疎かにすることはできなかったためである。韻書の中で字が同じようだが音は異なっており、部が異なれば等も異なるというのは、各地の方言を総合して、細かい点を分析し、審らかに反切を定めたからであり、細かくその脈絡を辿れば、筋道が立っているのである。その元を辿れば、先儒の経典に対する音注の諸書より来ているのである。

六朝人の音学は、後の人の及ぶ所ではなく、その統一の功績は秦の篆書に匹敵するといっても間違いではない。いま『詩経』三百篇によって古韻を考える時も、ただ今韻と合わせて、今音と古韻との異同を著すというのならばよい。「ある字は後人が誤ってある韻に入れた」或いは「ある韻に紛れ込んでしまった」というのは、顧炎武の過剰な説である。

顧炎武の『唐韻正』は、古音と比較して、今音を確定させた「後人」（六朝人や唐人）の誤りを正すという趣旨のものである。江永はそもそも六朝人の音学の目的が、考古ではなく、当時の各方言音の分析による語音の統一にあったと考え、それ自体が六朝人の審らかな分析の上に成立したものであるとみなし、それを古音によって正すということを批判するのである。

江永はこれに続けて顧炎武の今音を正すという考えに対する批判を続ける。『古韻標準』「例言」の該当部分の文は長大であるのですべて引用はしないが、その要点を要約すれば以下のようになる。

一、沈約らは古音に合う韻譜を作ることができず、結果的に「音学の一変」

を招いたという批判に対して、今音に依って当時の用に供するための韻譜を作ったのであり、これをもって沈約を責めることは誤りであるとする。但し沈約の欠点として、今韻譜と同時に古音賦を作らなかったことを挙げる。そして、沈約が復古できなかったことを責めるのは、「許慎が『説文』を作るのに、金文や科斗書を用いなかったのを、遡って李斯が古文を撤廃したことを責める」（注11）が如きものであるとする。

二、顧炎武が古音の復興を望んでいることに対して、これを食器に例え、古代の食器の形状を考証するのはよいが、古代の食器で以て現代の食器を置き換えるのは不可能であると述べ、顧炎武の『音学五書』も自らの『古韻標準』も、あくまで考古・存古のための書であり、古音を復活させること（復古）などできないとする。

江永にとっては、今音は古音とは異なる体系であって、独立して扱うべきものであった。また、六朝人によって完成された分析方法は、今音のみならず古音にも適用することができるものであり、今音を分析する学問自体もまた、一つの分野を成し得るものであった。

古音学の発展において、江永は顧炎武に欠けていた審音の要素を補ったとして評価されている。審音とは一言でいえば、言語音の体系性の分析であるが、その際に江永が最も重視した資料は、『切韻』系韻書に対応した等韻図であり、それを分析する等韻学であった。『古韻標準』と並ぶ江永の音韻学関連著作である『四声切韻表』及び『音学辨微』では、専ら今音の分析が行われており、これも江永の今音と等韻学に対する重視をあらわすものである。この等韻学の成果による、母音の弇侈という区別の古音への導入（注12）が、顧炎武説からの次なる進歩となったことは、すでに広く知られていることである。

以上、簡潔に纏めると、江永にとっての今音や今音学とは、単なる古音への足掛かりにとどまらず、それ自体が研究価値の認められるものであり、またその成果が古音研究にも還元されうるという点でも価値のあるものであった。また今音によって古音を駆逐した六朝人に対しても、顧炎武がその誤りを正すという態度で臨んだのに対して、江永はその音声に対する緻密な分析を認め、音声の統一という点に関しては功績があったとした。

四　戴震の今音研究

ここまで今音に対する顧炎武と江永のそれぞれ異なる認識を考察してきたが、続いて彼らとはまた異なる例として戴震を見てみたい。

戴震は音韻学において江永の影響を強く受けており、また江永の『古韻標準』の編纂に参加（注13）するなど、その研究姿勢には江永と類似する点が多い。特に「人間の言語は様々に移り変わるが、音声の変化には自ずから制限がある」（注14）や「音声の変化には古今の別があるが、音声の大別には古今の別が無い」（注15）と述べるように、戴震は言語の歴史を通じた普遍的特性に注目しており、江永と同様、古音を唯一絶対の「正しい」音であるとはみなさず、古音にも今音にも共通する原則を認め、現代で言う所の音声学的側面にも注目する。しかしながら、今音学そのものの価値に対する意見に関しては、江永とは多少異なる点がみられる。戴震の主な音韻関連著作には、『声韻考』・『声類表』がある。『声韻考』は戴震が自身の音韻に関する小論文を整理したものであり、ここではその中から、戴震の今音および今音学に対する態度を窺わせる部分を見てみたい。まず「書玉篇巻末声論反紐図後」（『戴震集』文集巻四、上海古籍出版社、一九八〇年）に以下のようにある。

宋元以來、爲反切字母之學者、歸之西域、歸之釋神珙、蓋由鄭樵沈括

諸人、論古疏漏、惑於釋氏一二剪劣之徒、眠娗誣欺、據其言以爲言也。今珙之反紐圖具存。其自爲序曰「昔梁沈約創立紐字之圖」。然則珙所爲圖、遠在沈休文後、祖述休文者也。彼夫競指珙爲北魏時人、始傳西域三十六字母於中土、徒因世俗言休文始造韻、欲追而上之、以前於休文、爲中土之有反切韻學、本乎西域左證耳。

釋氏之徒、舉凡書傳所必資、竊取而學之、既得則相欺相誕、以造爲西域之説、固不足指數。獨怪信之者之數典不能稽遠、又筆之書以惑後人。噫其陋也。

況珙序内併及『元和韵譜』。自齊永明梁天監下迄唐憲宗元和間、三百二三十載、珙更後乎元和、而移其人於四三百載之前、而莫之或辨、何哉。珙圖無所謂字母者、惟『五音聲論』列字四十而不曰字母、與今所傳三十六字相與齟齬。王伯厚言「『玉篇』卷末附以沙門神珙『五音聲論』『四聲五音九弄反紐圖』」。考珙自序、不一語涉及『五音聲論』。殆唐末宋初或雜取以附『玉篇』末、非珙之爲。故列之珙『反紐圖』前、不題作者姓氏。

『玉海』有三十六字母圖一卷、僧守溫撰。呂介孺曰「大唐舍利創字母三十、後溫首座益以孃牀幫滂微奉六母」。然則字母三十六、定於守溫、在珙後者也。雖唐之季已有是、而其學不著、故終唐之代以迄宋初、絶不聞字母之稱。

今經傳字書所有反切、仍魏晉齊梁隋唐相傳之舊。方漢時崇治經藝、鄭康成氏尤爲世所宗。其後樂安孫炎受學康成之門人、稱東州大儒。顔之推『家訓』、陸德明『經典釋文』、張守節『史記正義』皆曰「孫炎創立反語」。『崇文目序』曰「孫炎始作字音、於是有音韵之學」。王伯厚曰「世謂倉頡制字、孫炎作音、沈約撰韵、爲椎輪之始」。此唐宋人論反切字音、咸溯源叔然也。逮乎末失、則謂出神珙、出梵僧矣。反語之興、不啻七八百載、而後競傳守溫之字母。近儒乃莫有能言叔然者、吾故書此、以見經史字音。儒生結髮從事、勿迷失其師承也。

宋元以来、反切・字母の学を行うものは、その起源を西域と釈神珙に求めるが、これは鄭樵や沈括等が古を論じる際にぬかりがあり、浅劣な仏教徒たちが欺瞞や嘘を並べるのに惑わされ、それに基づいて説を為したためだろう。今でも神珙の反紐図は残っており、その自序に「昔梁の沈約が紐字の図を初めて作った」とある。ならば神珙が図を作ったのは、沈約より後ということであり、神珙は沈約を祖述しているものである。神珙が北魏時代の人であり、西域の三十六字母を初めて中国に伝えたとしきりに主張するものは、世の中で沈約が初めて韻を作ったと言われているので、遡って神珙を沈約に先立たせ、中国の反切韻学は西域に由来することの証左としようとしているだけである。

仏教徒はおしなべて書伝について必要があると、盗み取ってこれを真似して、真似ができるようになると虚偽で人を騙し、西域の説であるとするということは、もとより十や二十に止まらない。これを信じる者は典故を並べるだけでそれを考証することもできず、さらには書物に書き著し、後の人を惑わしてしまうのだ。ああ、なんと見識の狭いことか。

ましてや神珙は自序で『元和韻譜』にも触れており、斉の永明(四三八-四九三)・梁の天監(五〇二-五一九)から唐の憲宗の元和(八〇六-八二〇)に至るまで、三百二三十年もある。元和よりも後の人である神珙を、四三百年も前に移動させておきながら、誰もこれを見分けられないとは、いったい何故なのか。神珙の図にはいわゆる「字母」はなく、『五音声論』に四十字を列挙しているが、これも「字母」とは言っておらず、今伝わる三十六字母とは合っていない。王応麟は「『玉篇』

の巻末に沙門神珙の『五音声論』と『四声五音九弄反紐図』が附されている」と言う。しかし神珙の自序を見ても、『五音声論』には一言も触れておらず、おそらく唐末宋初に何処かから取ってきて『玉篇』の末尾に付けたのであり、神珙の作ではないために、神珙の『反紐図』の前に置かれ、作者の氏名が書かれていないのであろう。

『玉海』には三十六字母図一巻があり、僧侶の守温の撰とされている。呂維祺は「大唐の舎利が三十字母を作り、後に守温が娘・牀・幇・滂・微・奉の六母を加えた」という。ならば三十六字母は守温により定まったもので、神珙よりも後である。唐末に既にあったとはいえ、その学は流行せず、唐の終わりから宋初に至るまで、「字母」という語は見えないのである。

今の経伝や字書の反切は、魏・晋・斉・梁・隋・唐と古くより伝えられてきたものである。漢代には経芸を治めることを貴んでおり、鄭玄は特に世の中でこの道の宗師とされている。その後の楽安の孫炎が鄭玄の門人に学を受け、東州の大儒と称された。顔之推『家訓』・陸徳明『経典釈文』・張守節『史記正義』のいずれも孫炎が反切を作ったと言っている。『崇文目序』に「孫炎は初めて字音を作り、音韻の学はここに始まった」とあり、王応麟は「世の中では蒼頡が字を作り、孫炎が音を作り、沈約が韻を整理したというが、これが（学問の）始まりである」と言っている。これは唐宋の人が反切・字音を論じる際に、みな孫炎にその源を求めていたということである。後の世に至っては、これを神珙や梵僧に由来すると言い出したのだ。反切の起源は、七八百年前どころではないが、後に競うように守音の字母を伝えるようになったのである。近頃の学者では孫炎に言及できる者がいないため、私はここにこれを記し、経史の字音を現すのである。儒生は学問を始めてから、その師伝の教えを失ってはならないのだ。

この文は、今音を分析するための反切や音韻学の起源を論じたものである。この説が正しいか否かは置いておき、戴震はここで反切の起源を考証し、西方（「釈氏の徒」）伝来説を否定、孫炎にその起源を求め、孫炎の学問の元をさらに辿れば、鄭玄に行きつくことを指摘している。

ではここから、戴震の今音に対する認識を探ってみよう。孫炎に反切の起源を帰すること自体は、戴震の独創ではなく、戴震の考証の密なることには及ばないとはいえ、すでに顧炎武が『音学五書』にて指摘していることではある。しかしながら、その学問の系譜の強調は、この文の一つの特徴と言えるだろう。

鄭玄は周知の通り漢代の経学の中心的人物の一人であり、経書の解釈において絶大な権威を持ち、儒学の正統な流れ中に位置する人物である。それに対して、神珙や守温に代表される仏教徒（「釈氏の徒」）は、当然ながら儒教から見れば異端者であり、排斥の対象となり得るものである。この文全体の意図は、従来西域由来とされてきた等韻学や反切の学を、明確に中国古来のものであり、儒教的伝統と結びついたものであると主張するところにあることは明らかであろう。

戴震は江永と同じく、考古のみならず審音も重要であると考えていた。審音においては、韻書と等韻図がその基礎となる。ところで、戴震の音韻以外の業績に目を向けてみると、その代表的哲学著作『孟子字義疏証』などにおける宋学批判がある。戴震の宋学批判は、ごく簡潔にその要点をいえば、宋以降の学者たちが儒教の中に不純物である仏教の思想を持ち込み、聖人の教えを乱したというものである。言い換えれば、戴震は儒教を浄化し、「釈氏の徒」から取り戻そうとしているともいえるだろう。

これと同様の傾向が、今音学に関してもみられる。「書玉篇卷末声論反紐図後」における仏教徒に対する批判は、原文における「惑於釋氏一二剪劣之徒、眠娗誣欺」や「釋氏之徒、舉凡書傳所必資、竊取而學之、既得則相欺相誕、以造爲西域之説、固不足指數」の、特に傍線部のように、単なる事実の列挙による考証の域を超えた、感情の吐露を感じさせる言葉が用いられており、今音学の根幹である等韻や反切を仏教徒に窃盗されたことと、世の中の者がそれを信じていることへの一種の嘆きがうかがわれる。

戴震はこれほどまでの厳しい口吻を以て、音韻学西域起源説を徹底的に批判した後に、改めて鄭玄→孫炎→魏→晋→斉→梁→隋→唐という音韻学におけるある種の「学統」を示すことで、今音学が決して異端の学ではなく、鄭玄以来の伝統を受け継ぐものであり、宋学の如き不純さを孕むようなものではないと主張するのである。

この主張こそが戴震の今音認識そのものである。すなわち戴震にとって今音及び今音学とは、正しく宋学以前の正統な儒教の伝統の中に属したものであり、古音とは齟齬するものではありつつも、受け継ぐべき重要なものなのである。

また、この他にも「書広韻四江後」（『戴震集』文集巻四）にある以下の記述も興味深い。

> 隋唐二百六韻、據當時之音、撰爲定本、至若古音、固未之考也。然別立四江以次東冬鍾後、似有見於古用韻之文、江合於東冬鍾、不入陽唐、故使之特自爲部。不附東冬鍾内者、今音顯然不同、不可沒今音、且不可使今音古音相雜成一韻也。不次陽唐後者、撰韻時以可通用字相附近、不使以今音之近似而淆紊古音也。惜不能盡從斯例。
>
> （中略）
>
> 古音之説、雖近日始明、然鄭康成氏箋『毛詩』云、「古音填眞塵同」、及注他經、言「古者聲某某同」、「古讀某爲某」之類、不一而足。是古音之説、漢儒明知之、非後人創議也。
>
> 唐陸德明『毛詩音義』雖引徐邈、沈重諸人、紛紛謂「合韻」、「取韻叶句」、而於「召南」華字云「古讀華爲敷」。於「邶風」南字下云「古人韻緩、不煩改字」。是陸氏已明言古韻、特不能持其説耳。宋呉才老創爲「古通某韻」及「古轉聲入某韻」之説、戴仲達則有古正音非協韻之説、明陳氏、近顧氏考證益詳、而古韻、今韻究未得其條貫。蓋隋唐諸人辨聲之功多、考古之功少。呉氏・陳氏・顧氏則又考古之功多、辨聲之功少也。
>
> 隋唐の二百六韻は、当時の音に基づいたものであって、古音などに至っては、もとより考証はされていない。しかしながら江韻を独立させて東冬鍾韻の後に配置するのは、古い韻文を考えてのことであり、江韻は東冬鍾韻と合い、陽唐には入らないので、独立させて一部としたのである。東冬鍾の中に入れてしまわない（独用とする）のは、今音が明らかに異なるため、今音を無視するわけにいかず、今音と古音とを綯い交ぜにして一韻とするわけにもいかなかったためである。陽唐韻の後に配置しなかったのは、編纂の際に通用する字同士を近くに配置しており、今音が近いということで古音を乱さないようにしたのである。惜しむらくはこの例に徹底して従うことができなかったことだ。
>
> （中略）
>
> 古音の説は、近頃ようやく明らかになってきたとはいえ、鄭玄の『毛詩箋』に「古音『填』『真』『塵』同じ」とあり、他の経の注にも、「古は声某某に同じ」や「古は某を読みて某の類となす」のような記述は一つに止まらない。これは古音の説を漢代の学者たちが明らかに知って

おり、後世の発明ではないということである。

唐の陸徳明の『毛詩音義』は徐邈や沈重等を引き、「合韻」や「取韻叶句」などと言っているが、「召南」の「華」字には「古は『華』を読みて『敷』となす」とあり、「邶風」の「南」字には「古人の韻は緩いので、字をわざわざ改めなくともよい」とある。これは陸氏がすでに早くも古韻を明らかに言っているものだが、ただその説を一貫させられなかっただけである。宋の呉棫が「古は某韻に通ず」及び「古は声転して某韻に入る」の説を作り出し、戴侗は古正音によって協韻を否定した。明の陳第や近くは顧炎武の考証はさらに詳しいが、古韻も今韻もいまだにその条理を得られていない。これは隋唐の人は音の分析の功は多かったが考古の功は少なく、呉氏・陳氏・顧氏は考古の功は多いが音の分析の功は少なかったということであろうか。

この文で戴震が述べていることを理解するには、多少の解説が必要となるだろう。『広韻』において江韻は、東冬鍾の三韻の後に配置され、陽唐の二韻とは離れている。これは『切韻』系韻書に基づく韻図でも同様である。これは戴震をはじめ、当時の人々にとっては不自然に感じられただろう。なぜなら当時の人々にとっては、江韻の音は東冬鍾韻（-ong）よりは陽唐韻（-ang）に近く感じられたからである。戴震は今音でもこれは同様であったと考えた（注16）。一方古音においては、江韻字は東冬鍾韻字とともに東冬部に入り、陽部に入る陽唐韻字とは隔絶している。そこで戴震は、韻書が東冬鍾韻の直後に江韻を配置したのは、今音に依りつつも、古の韻文も考慮したものであると考えるのである。

戴震から見れば、江韻に対する処置からは、韻書がある程度は古の韻文に配慮していたことが窺われたのだろうが、その他の部分に関しては、この配慮が徹底されていないと思われたのだろう。中略の部分では、配慮がなされていない例が列挙されている。この部分は、韻書の考古の不足に対する批判であるとみなすことができるだろう。

後半部分では、まず古音学が鄭玄にまで遡ることのできる伝統のある学問であり、近年新しく作り出されたものではないということが述べられる。これは前出の「書玉篇巻末声論反紐図後」における、今音学を鄭玄にまで遡らせるのと同様の意図であり、戴震が学問の源を重視する傾向を持つことを示す部分である。

後半部分で最も重要となるのは、「隋唐の人は音の分析の功は多かったが考古の功は少なく、呉氏・陳氏・顧氏は考古の功は多いが音の分析の功は少なかった」という記述である。ここでは今音の担い手である隋唐人と、古音学の開祖である呉棫・陳第・顧炎武を比較し、前者には音の分析の功（「辨声の功」）が、後者には考古の功があるとしている。このこととの関連が指摘できるのは、前出の『古韻標準』「例言」において、江永と戴震が顧炎武について、「考古の功は多いが、審音の功は少ない」（注17）と評していることである。顧炎武への評価では、「考古の功」と「審音の功」が対立しており、隋唐人への評価では「考古の功」と「辨声の功」が対立している。「辨声」とは、声母や韻を細かく分けることを指すと思われるが、顧炎武への評価と隋唐人への評価を対照すると、「辨声」と審音とは類似した手法であると捉えられていることがわかる。すなわち戴震は、隋唐の今音学に審音と同様の功績を積極的に認めているのではなかろうか。

古音学における審音の導入は、江永及び戴震の古音学の成功の最大の要因である。顧炎武の研究における審音の不足を補うことこそが、江永と戴震による古音研究の神髄であり、その審音は近年発明されたものではなく、すでに隋唐の時代に行われていたことなのであった。隋唐人の「辨声の功」こそ

が、彼らの古音研究を形作る下地となっていたのであり、戴震にとってその功績は、彼らを顧炎武等と等しいものとして対比するに値するだけのものであったのである。

以上、戴震の今音に対する認識を簡潔に纏めると、戴震にとって今音及び今音学とは、儒学の正統な流れを汲む学問であると同時に、審音によって古音学に多大な貢献をするものであり、それ自体十分に価値のあるものであったと言える。

五　今音への認識の差異とその要因

第二章から第四章まで、顧炎武・江永・戴震の今音に対する認識を概観してきた。改めて確認すると、顧炎武は今音を平水韻から古音へと至る道の入門として考えていた。江永は等韻学の基礎となる韻図とともに、音声を統一した『切韻』それ自体の価値を認め、研究の対象とみなし、また等韻学で得た知見を古音学に還元することで、所謂「審音」による進歩を古音学にもたらすなど、単なる平水韻から古音への橋渡し以上に考えていた。戴震は、反切や韻図を漢代の鄭玄からの学統を汲むものとして、仏教的要素を徹底的に排除した上で、江永同様に今音学自体に価値を認めつつ、その審音の功績を、自らの審音に活用していた。

この三者の中でも、顧炎武の今音に対する認識は素朴かつ特徴的である。これは古音学という学問自体の実質的な創始者としてはごく自然な事ではあるが、この他にも、彼の学問観全体との関係を考える必要がある。

顧炎武の学問観については、梁啓超による宋明理学への反動としての考証学という見方を見直した、山井湧氏の研究（注18）が参考となる。山井氏は、顧炎武の学問を、考証学への発展の要素を含んだ経世致用の学として、その学問観を論じている。その中でも重要なのは、顧炎武が「伝注の功」を重んじているという指摘である。顧炎武は漢儒のみならず、考証学においては批判の対象となる宋学の主流人物にも高い評価を与えているが、これは宋学全てに賛同しているわけではなく、その経学上の功績を認めていたためであった。それに対して、経学に基づかない、実用性のない空疎な学問は、彼の批判の対象であった。

顧炎武のこの学問観は、その今音に対する認識とも密接に関係する。『音論』において彼が音学の沿革を説明する際に、最も鋭く批判するのは、実用性のない空疎な学問の代表である、科挙の為に改変された宋以降の韻書であった。そして今音を代表する韻書である『広韻』であっても、この批判は免れない。無論『広韻』の原版である『切韻』は、科挙の為に編纂されたものではない。しかしながら、それが後代科挙の為に使用されるようになったことは事実である。それに加えて、顧炎武にとって、今音は古音を滅ぼし、古人の韻書である詩三百五篇に齟齬し、「音学の一変」を引き起こしたものであって、仮にこれを経学に例えれば、「伝注の功」無く、かえって経書の本文を無暗に書き換え、経書に基づかない学問を作り出すことにも等しいことである。ゆえに顧炎武にとっては、今音韻書を活用こそするが、決して高い評価を与えないというのは、彼の学問観から考えても当然のことであった。

江永及び戴震においては、顧炎武の「復古」から、古音と今音とを相対化した「存古」及び「考古」への転換が行われ、それに伴って今音韻書への評価も向上した。この転換は、顧炎武が明朝の滅亡に伴って強い復古意識を持っていたことに対して、後の考証学者たちはそれを持たなかったことが主な要因であろう。その他にも、『音学辨微』等にみられる、江永の方言への興味も要因として挙げられよう。『音学辨微』において、江永は官話と方言の何れかが「正しい」とはせず、両者を等しく扱っている（注19）。これが古音

と今音をも相対化する、彼の認識の根底にある価値観であると考えられる。

江永と戴震の認識には共通点が多いが、一定の差異も認められることは、前述の通りである。戴震の仏教的要素排除の態度は、字句の考証が聖人の教え（六経）にまで繋がることを重要視する学問観（注21）からすれば当然のことではある。但しこれだけでは江永と戴震との差異は説明できないだろう。これに加えて、彼らの外来の学問に対する態度の相違も、重要な要因の一つであると考えられる。

明清の中国を考える上で、西洋の学問（西学）の伝来と影響は重要な要素の一つである。江永及び戴震の西学への対応に関しては、徐道彬氏がこれを詳細に論じている（注20）。徐氏の論ずる所によれば、江永は当時の「西学中源」論が流行していた学界において、独り西学と中国古来の学問とを平等に勘案しており、その態度の為に却って批判を受けたという。一方で戴震は「明修中学、暗渡西学（表向きには中国の学問を修め、裏では西学を行う）」という態度で、西学に中国の学問の皮を被せることにより、実際には西学を受け入れつつも、「西学中源」論の流行に適応して評判を高めたという（注22）。

この西学に対する態度の相違は、彼らの今音への態度にも関係する。今音研究において重要な資料である韻図は、サンスクリットを理解するための学問である悉曇学の影響を受けて成立したものであり、西洋の学問ではないが、純粋な中国の学問でもないという点では、「西学」と類似したものであるともいえる。江永にとっては「西学」であっても、それが正しければ受け入れることができたのだが、戴震には、「西学」を中国の学問に作り替えようという意識があり、それが今音学からの仏教要素の徹底した排除（注23）と、鄭玄以来の学問の系統の強調の一因となったのであろう。

以上、本章の内容を纏めると、顧炎武から戴震にかけての今音への認識の変化の差異の要因としては、顧炎武の「復古」から江永の「存古」への転換と、戴震に特徴的な外来の学問に対する排斥と学問の系統の重視という点が指摘できると考えられる。

おわりに

本論文では顧炎武・江永・戴震の今音への認識の相違とその要因を分析してきた。第五章での要因の分析においては、彼らの学問観や西学との関連に触れたが、この部分はさらなる検討の余地があり、今後も課題としたい。特に西学への態度と等韻学への価値判断の関連という問題に関しては、当時の学界の環境と併せて、研究の余地が多いかと思われる。

最後に、さらなる今後の課題として、顧炎武から江永及び戴震の今音に対する認識の転換を含む音韻学の変化によって齎された副産物としての、音韻学の独立化と音韻学自体の目的化ということについて触れておきたい。顧炎武においては、音韻学は復古の手段であり、また経学そのものでもあって、経学や理学といった学問の主流から離れるものではあり得なかった。江永及び戴震においては、古音の相対化や今音学の儒学化によって、音韻学は独立しうるものとなり、ようやく一つの学問として、それ自体が目的化することとなったのではなかろうか。この音韻学自体の目的化という視点は、音韻学という学問の盛衰を考える上で、重要な要素の一つであり、今後検討を進めていきたいと考えている。

注

（1）音韻学の文脈では「今音」とは通常、当代の音ではなく、隋唐時代の音を基礎とし

て、『切韻』系統の韻書によって定められた押韻基準および音韻体系を指す。本論文でも「今音」をこの意味で用いる。また「今音学」とは、今音の体系やそれに関連する諸分野の総称である。

（2）木下鉄矢「古音学の歴史――学的認識の形成及び深化の過程」（『中国思想史研究』創刊号、一九七七年九月）では、顧炎武がいかにして『広韻』を再発見したのかについて論じている箇所がある。木下氏の推測によれば、顧炎武は『広韻』再発見以前には平水韻系の韻書に基づいて古音を探ろうとしていたという。この指摘は、平水韻と古音との橋渡しとして今音をみなすという、顧炎武の今音認識の形成を考える上で非常に重要である。

（3）平水韻とは、『切韻』系韻書の韻目を合併することで、簡素化したものであり、一〇六韻（早期には一〇七韻）からなる。顧炎武以前には、この平水韻こそが隋唐の「今音」であると誤解されていたため、顧炎武は『音学五書』の『音論』にてこの誤りを正す必要があった。

（4）「審音」とは、音を審らかにするという意味の音韻学用語である。言語音の一定の制限や、その体系性を考えることにより、『詩経』等の韻文からの帰納だけでは見出すことが難しい区別を探し出すことを指す。後にも述べるが、審音を行う上で不可欠の資料が、『切韻』系韻書に基づいて作成された韻図であり、審音は今音学及び等韻学と不可分の方法である。

（5）段玉裁の成果としては主に、之脂支の分部、幽侯の分部、去声の否定の三点が挙げられる。戴震は審音の観点から、之脂支の分部のみを受け入れた。

（6）『広韻』は宋代の韻書であるが、隋代の陸法言の『切韻』を増補改訂したものであり、『切韻』から『広韻』に至るまでのいわゆる『切韻』系韻書は、韻の数の増加はあれども、基本的な体系に変化はない。顧炎武は「唐人の韻」を「正」すという意味の『唐韻正』を著しているが、この「唐韻」は実質的には『広韻』の体系を指す。以下文脈上『切韻』や『広韻』に頻繁に言及するが、いずれも今音を代表する韻書である。

（7）顧炎武は「答李子德書」（『音学五書』所収）にて、「學者讀之、則必先『唐韻正』、而次及『詩』『易』二書、明乎其所以變、而後三百五篇與卦爻彖象之文可讀也」と述べ、『唐韻正』にまず習熟し、今音と古音との違いを把握することを勧めている。

（8）顧炎武の目指すところが「存古」ではなくあくまで「復古」であることは、「三百五篇之詩、可弦而歌之矣」とあり、古音を指摘するだけでなく、実際に古音で『詩経』を読むことを最終目標としていることから読み取ることができる。第三章で述べるように、顧炎武のこの姿勢は、後の音韻学者の批判の対象となることとなる。

（9）原文は「欲審古音、必從唐韻始」である。なお同文にて顧炎武は、伝承過程の違いにより、一字に複数の音が伝わっている場合に、『広韻』がそれらを全て記録していることを、古音の考証に役立つとして、高く評価する一方で、科挙の試験対策用にそれらを削り捨ててしまった宋以降の韻書を批判している。

（10）「後人誤入某韻」や「後人混入某韻」というのは、顧炎武が『詩本音』及び『易音』にて、今音と古音とで所属する部の異なる字に対して加えている注の形式である。

（11）『古韻標準』の「例言」に「怪許叔重作説文、不爲鍾鼎科斗書、而顧祖李斯以亡古文也」とある。この譬えでは、『説文』が『切韻』に、李斯が陸法言以前の六朝の音韻学者たちにそれぞれ対応する。この譬えの趣旨が、六朝の音韻学者と『切韻』との功績を認め、弁護することにあるのは明らかである。

（12）江永はこれにより、真元分部、談侵分部、宵侯分部に当たる分部を行い、顧炎武古音十部を十三部に拡張した。

（13）『古韻標準』は江永編、戴震参定となっている。また「例言」にも「余既爲四聲切韻表、細區今韻、歸之字母音等、復與同志戴震商定『古韻標準』四卷、『詩韻舉例』一卷」とある。

（14）「転語二十五章序」（『戴震集』文集巻四）に「人之語言萬變、而聲氣之變有自

然之節限」とある。

（15）「書広韻目録後一」（『戴震集』文集巻四）に「音之流變有古今、而聲類大限無古今」とある。なお、「自然の節限」及び「声類の大限」が何を指すのかに関しては、木下鉄矢「戴震の音学――その対象と認識――」（『東方学』五十八号、一九七九年七月）に詳しい。

（16）これは事実とは異なる、戴震の誤りであると考えられる。現在では、隋唐時代の音においても、古音と同じく、江韻は陽唐韻よりも東冬鍾韻に近かったと考えられている。

（17）『古韻標準』「例言」に「細考音學五書、亦多滲漏。蓋過信古人韻緩不煩改字之説、於天田等字、皆無音。古音表分十部、離合處尚有未精。其分配入聲多未當。此亦考古之功多、審音之功淺。每與東原嘆惜之」とある。

（18）山井湧『明清思想史の研究』、東京大学出版会、一九八〇年一二月。

（19）『音学辨微』から一例を挙げれば、中古微母と喩母との違いを論じ、「官音方音呼微母字、多不能從唇縫出呼、微如惟混喩母矣。呉音蘇常一帶呼之最分明、確是輕唇、當以爲法（官話音や方言音での微母字の発音は、その多くが唇の隙間から音を出すという発音法ではなく、「微」は「惟」のように読まれ、喩母に混入している。呉方言の蘇州や常州の一帯では微母は明らかに区別され、確かに軽唇音で読まれており、これに従うべきである）」と述べ、呉方言を持ち出し、微母の元来の発音法を示している。これと同様に、官話と方言音とを比較して、方言音を元来の発音法であると断じている例は他にもあり、いずれも方言を劣ったものとせず、官話と同等に扱っていることが特徴である。これは江永が生涯長期間上京して官途を歩まず、地方において生活していたこととも関係するだろう。

（20）江永の西学への対応に関しては、徐道彬「論江永与西学」（『史学集刊』二〇一二年一月第一期）を参照。戴震の西学への対応に関しては、徐道彬「戴震学術地位的確立与『西学中源』論」（『清史研究』二〇一〇年八月第三期）を参照。

（21）戴震のこのような学問観は、『与是仲明論学書』における「經之至者道也、所以明道者其詞也、所以成詞者字也。由字以通其詞、由詞以通其道、必有漸」等から窺うことができる。

（22）戴震のこのような態度を端的に表すものとしては、戴震早期（二十歳頃）の著作である数学書『策算』の「除」における次のような記述が挙げられる。「西洋人舊法襲用中土古四分曆、其新法則襲回回曆、會望策又襲郭守敬、乃妄言第谷・巴谷測定、以欺人耳。（西洋人の旧法（ユリウス暦）は中国の四分暦を受け継ぎ、新法（グレゴリオ暦）はイスラム天文暦学を受け継いだものであり、朔望月の長さは郭守敬を受け継いでいる。ティコやヒッパルコスが測定したと妄言するのは、人を欺いているだけである）」。

（23）このような戴震の方法は、当時の「西学中源」論に合うものであるが、同時に仏教伝来の歴史的事実を無視しているとして批判も受けている。紀昀の「与余存吾太史書」（『戴震全書』所収、黄山書社、二〇一〇年）には、戴震が紀昀による反論を無視して『声韻考』を上梓したことが記されている。

【附記】

本研究は、日本学術振興会科研費（若手研究）22K12973「清代古音学史の多角的研究」による研究成果の一部である。

鳥羽　加寿也（とば・かずや）

一九九三年生まれ。大阪大学人文学研究科招聘研究員。専門は漢語音韻学及び音韻学史。共著に『中国思想基本用語集』（湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇二〇年三月）。主要論文に「楚簡韻読・韻譜（前編）」（『中國出土資料研究』第二十六號、二〇二二年七月）等。